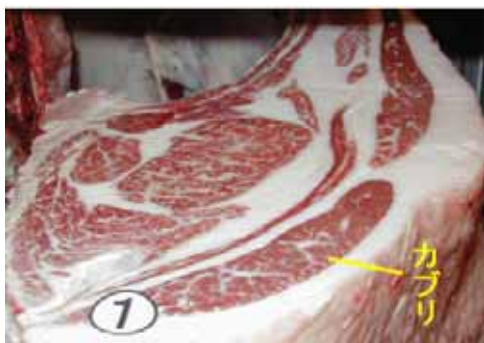


福井県ホームページ第10回原稿 中期の話1

アメリカのBSE、世界各国の鳥インフルエンザ発生、と物騒な事件が続きますが、みなさんお元気ですか？アメリカのBSE発生は、中国への和牛輸出再開の時期を少しはやめてくれるかもしれません。いずれにしろ、私たちは自分の牛さんと経営をしっかり護っていきましょう。

先月は、濃厚飼料による腹作りのお話しでした。今月は中期のお話しです。ただ、「中期」と一言にいても、カブリの発達からサシの発達、ロース芯の発達、などたくさんのイベントがあります。ですから中期のお話しは何回かに分けてしていこうと思います。今月はその第1回、カブリの発達とタンパク質の利用のお話しです。

カブリというのは枝肉の一番上のところにへばりついた半月型の筋肉です。本名は僧帽筋といって、みなさんが肩こりをする、あの筋肉です。



カブリが大きくてサシが入っていると肉屋さんは喜んで枝肉を買ってくれます。それは、焼き肉で上カルビと同様に高い部位となるからです。でもカブリが小さいと、こま切れ肉として扱われます。肉屋さんに言って値段を比べるまでもなく、こま切れと上カルビでは価値が全然違いますよね。

カブリは14ヶ月齢くらいが最大発達期です。ですから、この時期にタンパク質が不足していると大きくなってくれません。もしもカブリが小さいようでしたら、この時期のタンパク質が不足していないか見直してみましょ。牛さんの飼料でタンパク質を多く含むものといえば、やはり大豆が一番です。導入～前期では、僕は大豆粕の使用をお勧めしていましたよね？あれはなぜかという、導入期の9～12ヶ月齢という時期は、筋間脂肪の発達時期だからです。この時期に油脂を多く含む高カロリーの飼料を与えると、お肉屋さんが嫌う筋間脂肪が大きくなってしまい、逆にロース芯が小さく、サシも少なめになってしまうのです。その点大豆粕は大豆から油を絞った残りですから、高タンパクなのに低脂肪、低カロリー（大豆と比べると、ですよ）ですから、筋間脂肪の付着を心配しなくていいんです。ただし、大豆粕はDIP（分解性タンパク）が多いので、NFC（デンプン）とのバランスを取ってあげないと第一胃で発生するアンモニアの利用がうまくいかず、尿石症などの発生が増えるのでしたね。

さてカブリの発達時期ですが、先ほどもお話ししたように14ヶ月齢が最大発達時期です。この時期はすでに筋間脂肪の発達時期が終了していますし、そろそろサシを発達させるためにカロリーを上げていく時期です。ということは、

油脂を豊富に含んだ大豆を使っても問題ないのですね。さらに、D I Pを多く含む大豆粕ではN F Cとのバランスなどに気を遣う必要がありましたが、大豆を炒った乾熱大豆（炒り大豆とかきなこです）では、熱処理によってD I Pが減ってU I P（非分解性タンパク：第一胃で分解されず第4胃で人間と同じような酵素による消化を受ける）が増えていますから、これらをタンパク源に使うと、尿石症などの心配が少なくて済みます。僕は、カブリの薄い農場には、12～15ヶ月齢の間、乾熱大豆を1頭あたり1日500g程度与えてもらうことが多いです。ただし、それぞれの農場ごとに飼料が違うので、みなさんがやってみたいときには、何頭かで様子を見ながらやって下さいね。それと乾熱大豆を添加する場合にも、初日は100g程度にして、徐々に増やしていくやり方を忘れないで下さいね。牛さんの食欲を保つ一番のコツは第一胃の発酵を健全に保つ、ということです。またサシも第一胃で作られますから、第一胃の発酵にはくれぐれも注意しましょう。と、いうわけで、来月はサシのお話です。